

グローバルCOEプログラム

タイ国チュラロンコーン大学およびマヒドン大学との部局間連携 大学院生活健康科学研究科／食品栄養科学部



大学院生活健康科学研究科

教授／研究科長 小林裕和、教授／専攻長 横越英彦、教授 坂口真人

食品栄養科学部 教授／学部長 中山 勉 薬学部／薬学研究科 教授 野口博司

事務局COEスタッフ 野島百合子

2月22日(日)、気温1℃の余寒の静岡を後にして、中部国際空港セントレア経由で降り立ったバンコクは、34℃の猛暑で、多湿のため肌がねっとりしてきた。同行した6名のうち4名はタイ国は初めてであり、時差はほとんどないものの、この寒暖の差は身にしてみた。食事なども気になっていたが、バンコクで目にした総ては東京と変わらず近代化されており、何の心配もいらなかった。食べ物もおいしく、2日後の帰国時には、皆、体重が増えているように感じた。

今回の訪問の目的は、一義的には、チュラロンコーン大学 (Chulalongkorn University) 薬学部との学術交流の締結であり、本学グローバルCOEプログラムの一環として訪問した。既に締結が完了している本学薬学部の野口教授が今回の水先案内役となった。チュラロンコーン大学は、24あるタイ国の国立大学の中でも格式および入学難易度が最も高い最古の大学である。所属する研究者、研究設備ともに国内随一を誇っており、国策に基づく研究活動が活発である。Wanchai De-Eknamkul准教授が、事前に訪問先を調整してくれていた。2月23日(月)午前中に、薬学部において、Pornpen Pramyothin学部長、Sarinee Krittiyanunt副学部長を含み、計10

名が参加の下、お互いの部局と各自の研究、また本COEプログラムと今回の訪問の意図等をパワーポイントを用いて説明した。その後、Pramyothin学部長、中山学部長、小林研究科長とが協定書に調印した。協定の内容は、(1)教員、研究者および学生の交流、(2)共同研究およびシンポジウムの提携、(3)相互に関心のある研究分野の情報・文献および研究資料の交換である。

この機会を活用し、チュラロンコーン大学の他部局との連携を推進すべく、環境科学研究所 (Institute of Environmental Research) を訪問し、Thavivongse Sriburi所長との意見交換および研究所内を視察した。当研究所は、タイ国の環境行政の一環として重要な機能を担っており、河川水等の分析が行われていた。バイオテクノロジー遺伝子工学研究所 (Institute of Biotechnology and Genetic Engineering) では、Amorn Petsom所長他3名と面談し、お互いの研究について議論した。そのうち複数名は、日本への留学経験があり、タイ国では、欧米および日本において博士学位を取得することがその後の研究者人生に有用なようである。さらに、理学部を訪問した。ここでは、Supot Hannongbua学部長他、各学科の代表者を中心に12名との会合の場が用意されていた。本COEプログラムのことを驚くほどよく調査しており、会合にはこちらの意図に沿った陣容を揃えていた。Hannongbua学部長より学部全体の説明を聞いた後、パワーポイントを使って本訪問の意図を説明すると共に、それぞれの研究内容を紹介した。この場で、本プログラムが企画するCOEセミナーへの参加に対して合意を得た。さらに、学部内を視察し、各学科の設備等を見学した。タイ国の理学部は、日本のそれと異なり、自然科学全般を包括する応用研究に力点が置かれている。とりわけ、食品テクノロジー学科 (Department of Food Technology) の分析機器は、最新鋭であり、タイ国内の食品成分基準等の制定のための分析が行



チュラロンコーン大学薬学部における学術交流協定調印式
中央がPornpen Pramyothin 薬学部長



チュラロンコーン大学バイオテクノロジー遺伝子工学研究所中央がAmorn Petsom所長、向かって左がWanchai De-Eknamkul准教授



チュラロンコーン大学理学部での研究打ち合せ

われていることを垣間見た。

2月24日(火)は、マヒドン大学(Mahidol University)を訪問した。マヒドン大学は、タイ国の大学成績一覧では1位にランキングされており、アジアでも有数の名門である。小林研究科長が20年前に博士学位論文を指導したJarunya Narangajavana(現:マヒドン大学准教授)が、当日の訪問先の調整を済ませていた。まず、理学部において、Sasivimon Swangpol副学部長、Sittiwat Lertsiri副学部長を含み、13名との会合の場が用意されていた。その後、Skorn Mongkolsuk学部長が合流した。ビデオを用いた当学部の説明の後、各学科の代表者5名がそれぞれの研究内容について説明し、本訪問者もそれぞれの研究について紹介した。今後の本COE拠点との連携・交流に関して具体的な討論を行った。さらに、各学科を視察した。特に、当学部には、薬学科(Department of Pharmacology)があり、本COEプログラムと共有する研究テーマが複数見いだされ、今後連携を強化すべき価値は高いと判断した。

午後は、環境自然科学部(Faculty of Environment and Resource Studies)を訪問した。Sittipong Dilokwanich学部長他8名と会合した。ビデオを用

いた当学部の説明の後、本COE拠点の研究・教育について、パワーポイントを用いて概説し、各研究者が個々の研究内容について説明した。さらに、本COE拠点との連携について議論し、部局間協定の締結、共同研究、COEセミナーへの参加、学生の相互交流等の可能性について意見を交換した。また、学部内の会議室等の付帯施設を視察した。これらの規模は、タイ国における環境科学への期待の大きさ



マヒドン大学理学部での研究者会議

を物語っていた。別途、横越教授は、環境自然科学部に隣接する栄養学研究所(Institute of Nutrition)を訪問し、Visith Chavasit所長他4名と会合した。この場で、各自の研究内容に関して討論し、さらに、研究所内を視察した。

いずれの部局でも部局長を中心に議論の場が用意されており、視察を含めて、事前の調整が完璧であった。さらに、タイ国の国民性は控えめで、これらの点において、日本人と気質を共有するように感じる。本訪問に対する先方部局の期待は大きく、本学としては、これを機会にタイ国からの留学生の受入を含め、積極的な連携を発展させたい。



マヒドン大学環境自然科学部中央がSittipong Dilokwanich学部長